

沖繩伊江島方言の代名詞

生 塩 睦 子

はじめに

小論は、沖繩伊江島方言の代名詞の使われ方について報告しようとするものである。

伊江島は沖繩本島北部本部半島の北西約 9 km に位置する、総面積 2,200 ha の島である。人口5,620人、世帯数1,857 (1990年12月現在)。東江上・東江前・西江上・西江前・川平・阿良・西崎・真謝の8か字からなり、主生業は農業である。

島の言語生活は共通語が主になってきている。中年以上層ではシマグチ(伊江島方言)も使われているが、沖繩本島等他地域方言や共通語の影響を受けており、純粋なシマグチはわずか古老層において保たれているのみである。

本報告の資料は、第一次調査で得られたもの(1964年8月より1967年8月まで134日間の現地調査中に得られた自然会話録音文字化資料)が主となっている。主な方言話者は次の6名の方々である。知念勘蔵氏(東江上, 1901~1977)、伊是名カマト氏(東江上, 1887~1970)、儀間徳助氏(東江上, 1889~1969)、知念牛助氏(東江前, 1881~1983)、東江寛輝氏(東江前, 1887~1982)、玉城三郎氏(西江前, 1885~1986)。上記6名の方々の言語は、文法事項に関しては地域差が認められないので、伊江島古老層方言の同一資料として扱った。

一般の名詞からは異質の存在である代名詞を、人称代名詞と指示代名詞に分けて述べる。機能上からは、代名詞は一般の名詞と大差ないが、助詞の付き方にわずかな違いがみられる。

1 人 称 代 名 詞

当方言の人称代名詞は比較的単純な体系で、所属語は多くない。次に一覽表を掲げる。方言表記は簡略音声記号を用いる。

伊江島方言の人称代名詞

人 称		単 複	単 数 形	複 数 形
自 称			wa:, wan	watta
対 称	目 下 及 び 対 等		?ra:	?ri:
	目 上	敬 愛	?uga	?ugata
		尊 敬	?uma ?undɕu	?umande ?undɕuna, ?undɕunata
他 称	目 下 及 び 対 等		huri ?ari	hurita ?arita
	目 上		?ama	?amande
不 定 称	目 下 及 び 対 等		ta:	ta:ta
	目 上		(da:-nu hata)	tandaru (da:-nu tʃuntʃa)

複数形は、単数形に接尾辞 =ta·=na·=nata. =nde が添加したものであるが、?ra:だけは例外で複数の話し相手を指す特別な語である。

男女差による代名詞使用の違いはないといってよい。

(1) 自 称

wa: · wan

話し手一人「私」を表す語形は、wa: と wan の二語がある。wa: の方が用法は狭い。

wa: は主格（ガ格）に立つときと、連体格（ノ格）に立つ時に用いられるが、主格を表す助詞 nu <が>も、所有格を表す助詞 nu <の>・ga <の>も後置されない。

主格に立つ例

- ① ?ma: dʒi wa: ja: ʃugati, pe:ri sidzimiran nare: naraŋ.
 <そこへ行って 私が家をつくって、おいはぎを退治しなければならない。>
- ② wa: sigo: ʃu:tu, do:diŋ nusiti turaʃi:.
 <私が都合つけますから、どうぞ（船に）乗せてください。>

wa: が強調される時は、係助詞 du <ぞ> などが後置される。

- ③ ?ra: tʃimamage:-nukwe-dun ʃʃai ʃi:-ja, wa:-du ʃimpai ʃu:ru.
 <おまえが心迷いなんぞでもしたりした時は、私こそ心配する。>

連体格に立つ例

- ④ wa: ?ma: <私の馬>, wa: sidza-nu jakumi <私の年上の兄>
- ⑤ wa: mun-du jaru. <私のものだよ。>
- ⑥ wata tʃo:dentʃa-naŋ tan wa: gutu wakati wurəŋ.
 <私の兄弟たちでも 誰も私のごと（私のように）わかっていない。>

体言に直接つづく使い方には、次例⑦のように同格を表す場合もある。

- ⑦ ?na nun najumi-e, wa: ?wi:mun-nu.
 <もう何もできるもんかね、私（なんぞ）老人が。>

wan は連体格に立ちえない。それ以外、文中どこにでも立つ。主格に立つときは、wan 単独で使われるよりも ja <は> や n <も> など係助詞を伴って使われることが多い。wan の n は、後続子音によって nu に替変する。

係助詞 ja <は> が後置された例

- ⑧ wan-ja pama-nai wuru tʃie-tu-jo:, ?a:nu pappa-tu ʃima jataŋ, watta ni:panda. <私は浜に（働いて）いる千江とね、あのおばあさんと島だった、私たち祖父母と孫は。>
- ⑨ wano: ?inaka-ŋkai-ja ?itʃaŋ. tʃa: sikanebakujo jatasiga-jo:.

〈私は 田舎へは行かない。いつも養いばくろうだったけどね。〉

- ⑩ wano: wata hondʒa-du tʃaŋ-do:-ja:.

〈私は 綿を買いに来たんだよ。〉

例⑧のように ja〈は〉が融合しない形よりも、例⑦⑧のように wan の
替変形 wanu に ja が融合した形 wano: で用いられるのが普通である。

係助詞 n〈も〉が後置された例

- ⑪ wanu-n ?i:dʒima-ŋkai watatʃi turafji:.

〈私も 伊江島へ渡して下さい。〉

- ⑫ wanu-n ?itʃe: mafj jataru-munnu.

〈私も 行けばよかったものを。〉

係助詞 tʃon〈さえ〉が後置された例

- ⑬ wan-tʃon hakanu-munnu, nu:ga ?ra: hatʃaru.

〈私でさえ 書かないものを、何故おまえが書いたのか。〉

watta

wa: に複数を表す接尾辞=ta の付いた形。「私たち」にあたる語である
が、話し手一人を表す時にも用いられる。

- ⑭ ?uni: watta: tʃu:ma-nai wutasiga, sanningubu:-di ?ju:ru
dʒi: dʒu:gunin-fj ?atataŋ. 〈当時 私たちはいっしょに居ったが、
3人5分という土地が15人であった (割り当てられた)。〉

- ⑮ watta munu ?umuti:-ra dʒu:gurukuna:-jake pataru ba:-
nu ?atattsa: . 〈私が物を覚えるようになってから、15、6歳位まで (ウ
プイミの馬が) 走ったことがあったよ。〉

- ⑯ watta-du panafj-ja najo: . 〈私の話はもうないよ。〉

- ⑰ taiwan-nde:-ra tʃa:-ra, ?unu sama: watta: waharansa.

〈(あの種の豚は) 台湾などから来たのか、そのようすは私にはわからない
よ。〉

例⑭の watta は複数の意味であるが、例⑮⑯⑰はいずれも自分ひとりの
意である。watta が強調される時は、例⑯のように係助詞 du〈ぞ〉が

watta と修飾される名詞との間に挿入される。

複数形 watta は、単数形 wa:・wan 二語が使用される場面にはどこにでも立つことができる。

格助詞 nu <の>・ga <の> を伴わないで連体格に立つ。

⑮ watta jima: <私たちの島>, watta ja: <私たちの家>

⑰ ta: munu tutti-ŋ nun kudʒo:-ja tʂaŋ. watta k'wantʃa-du ju:ru. <誰のものを取っても何も苦情は言わない。私たちの子らがするんだもの。>

主格に立つときは、主格を示す格助詞 nu <の> を伴わない (例⑮)。例⑭⑰の watta: と長呼された形は、係助詞 ja <は> が融合した形である。

du:・du:na

du: <自分>・du:na <自分ら> は、普通名詞であるが、代名詞的に用いられることがある。du:na が単数の意で用いられることもあるが、この場合ことに謙遜の意がこもるようである。

⑱ du:na-no: ŋkafirinʃo: ?arantu, nakaju-nu tʃu:-du jatu wakaram-ba:. <私なんか [が] は 昔の人ではないから、中の世の人だから、わからないんだ。>

⑲ du:na: ?inaka-ŋkai ?itʃuru ʃikata naransa, watta:.

<私なんか 田舎へ行くことはできないよ、私は。>

この du:・du:na は、男性に使用が多い。

(2) 対 称

?ra:・?ri:

?ra: は単数形で「おまえ」「君」、?ri: は複数形で「おまえら」「君ら」にあたる。自分と対等の者あるいは目下の話し相手を指す。

⑳ ?uttsa-du ?ra: mutʃu:ʃuru ji:buj.

<それだけこそ おまえが持つことのできるほどよい量。>

㉑ ?ra:, ja: ?idʒi tʃa: wahatʃuki:.

〈お前、家へ行ってお茶をわかしときなさい。〉

- ②4 huri-ja ?atu sidʒuru mun jatu, ?ra-ŋkai tʃitʃatʃi wuke:,
 ?atu-ŋkai judzi:watajutu…… 〈これは後を継ぐ者だから、おまえに
 聞かせておけば、後へ譲りわたるから……〉

例②3は役人が百姓に、②3は夫が妻に、②4は祖母が孫に語ったことばである。

?ra: に接尾辞 =gu の付いた形 ?ra:gu は、相手を非常に卑しめた語で、けんかをしかける時などによく使われる。

- ②5 ?ra:gu-i k'a:ʃuru ?umu-nu ?ami.

〈おまえなんかに食わせるイモがあるものか。〉

?ri: は、自称の複数形と同様に単数の意味でも使われる。

- ②6 ?ri: jinau-du jan-do:. 〈おまえは女なんだよ。〉

- ②7 ?ri: ?ubire: tʃanni. 〈おまえ おぼえてはいないのか。〉

例②6は祖母が孫娘に、②7は古老が中年男性に向けたことばである。

対称 ?ra: · ?ri: の用法は、自称に準じる。主格に立つときは、主格を示す格助詞 nu 〈が〉を伴わない (例②1)。?ra: や ?ri: が強調される場合、係助詞が後続する。

- ②8 ?ra:-dun makire:, ?itʃattsa hakijo:.

〈おまえでも負けたら、いくら賭けるか。〉

連体格に立つときは、格助詞 nu 〈の〉・ga 〈の〉を伴わない。

- ②9 ?ra: ʃumutsi 〈おまえの本〉, ?ri: ?upufu 〈おまえのおじいさん〉

- ③0 ?ra: haka-ja ?i:dʒima ŋketi pujutu, ʃindu:ʃu:-ja
 sakaratʃi-jo:. ʃimamurakana:-ja tuikurutʃi-jo:. 〈おまえの墓は伊
 江島に向けて掘るから、船頭主は栄えさせよ。島村カナーはとり殺せよ。〉

?uga · ?ugata

軽い敬意をもつ相手に対して使われる。百姓同士など面識のある間柄のとき若年者が年長者に対して用いたり、また、身分のある若年者が身分の低い年長者に向かって用いたりした。

③① ?uga-n ?agori-be:. <あなたもおあがりなさい。>

③② ?uga-tu nande:-bike: me:-ga. <あなたと何代ばかり前ですか。>

例③①の述部 ?agori は、軽い敬意のこめられた動詞 ?agwen <上がる(食べる意)> の命令形である。例③②では、敬意の全く入らない述部が呼応している。このように、?uga の敬意度は高くない。

複数形 ?ugata は、単数の意でも用いられるが、概して多用されないようである。

?uga ・ ?ugata の用法は、?ra: ・ ?ri: に準じる。

?uma ・ ?umande

?uma の原義は「其処」。複数形 ?umande の=nde は「など」の意。上記 ?uga より一段と高い敬意のこもった語であるが、単数形 ?uma が使用されることは少なく、すでに大正期にあまり使用されていなかったという。複数形 ?umande はよく使われる。複数の意に用いられることはもちろんのこと、単数の意でも用いられる。

③③ ja:-nu ?amma-ja ?uma: ?ikutsi-nu k'wa: jajabe.

<家のおかあさんは あなたが何歳の時の子供さんでございますか。>

③④ ?umande tjiwaminfori:. ?umande-nu tjiwaminseruttsa:,

wa: mutjabinj. <あなたがお決めください。あなたがお決めになっただけ、私が負担します。>

この敬称 ?uma ・ ?umande の用法は、自称および敬意の入らない対称 ?ra: ・ ?ri: と違って、例③④のように主格を表す助詞 nu <が> が現れる。また、連体格の nu <の> も後置される。

③⑤ ?umande-nu ?upufo: tjiikuduj jansetakaja.

<あなたのおじい様はチクドゥンでいらっしゃいましたか。>

?undzu ・ ?undzuna ・ ?undzunata

上記 ?uma ・ ?umande と同じく、?uga より一段と敬意は高い。

?uma は在来の語で、?undzu は外来の語という意識があったようである。村長など位の高い人や、農民でも面識のない古老に対しては、?umande

も ?undʒu も使われた。役人や僧侶など島外の人に対しては普通 ?undʒu が使われた。医者や勤め人など島の上層階級家庭では、妻が夫に ?undʒu ということがあったようである。

複数形としては ?undʒuna と ?undʒunata があるが、前者の方が多く使われる。

敬称 ?undʒu の用法は、?uma・?umande に準じる。主格に立つときは、格助詞 nu <が> が後置される。この nu は純粋方言話者では省略されることはない。

③⑥ ?undʒu-nu-du ?inʃotʃamunna.

<あなたが [ぞ] おっしゃったではありませんか。>

③⑦ ?undʒu-no: ?utsitumi-bikei-du ʃinʃeru.

<あなた [が] は (家庭を省みないで) お勤めばかり [ぞ] なされます。>

例③⑦の no: は、主格を表す助詞 nu <が> に係助詞 ja <は> が付き、融合変化した形である。

連体格に立つときは、助詞 nu <の> が後置される。この nu も省略されることはない。

③⑧ ?undʒu-nu ?upuʃu <あなたのおじい様>

?undʒu-nu hanʒe <あなたのお考え>

(3) 他 称

他称のみを指す語はない。指示代名詞で代用する。

huri・hurita・?ari・?arita

huri <これ> は、同座している話し相手以外の人を指すとき、?ari <あれ> は同座していない人を指すとき用いられる。

③⑨ ʃimamurakana:-di ?ju:si-ga tuʒi-ja, ?ra:-juka-ŋ ka:ge:

tʃurasa. ?ari juruʃi ?ra: tuʒi ʃuŋ-di ?ju:si-ja

jukuʃi-du jatu, ?ikanse: mafi-do:. <島村カナーという者の妻は、

おまえよりも姿は美しい。彼女を離縁しておまえを妻にするというのは嘘

であるから、行かないのがいいよ。〉

hunu tʃu 〈この人〉・?anu tʃu 〈あの人〉という言い方は、huri・?ari よりも敬意がこもっている。

- ④① ?anu tʃu:-ja ʃakumuʃi jatu, ʃi:ti-du nigare: sigui ti:
k'a:sariru padzi jatu…… 〈あの人はかんしゃく持だから、しいてお願ひすればすぐ手を食らわされるだろうから……〉

複数形 hurita・?arita は、単数の意味で使われることはない。

- ④② ?unu ?ma:hantʃa hurita-jatin ?an ʃuti ?ma:-wuti
?asidi-bikei…… 〈その孫たち これらでも ああしてそこで（手伝いもせず）遊んでばかり……〉

?ama・?amande

?ama・?amande の原義は「あそこ」「あそこら」であるが、他称の敬語として用いられる。複数形 ?amande は、単数の意でも用いられる。

- ④③ ?ama-nu ?imenʃoro:da tʃitʃi wuki-jo:.
〈あの方がいらっしゃる間に 聞いておきなさいよ。〉
- ④④ ?itʃa jatara, watta: ?amande-tu……
〈どうだったろうか、私はあの方とは……〉

(4) 不定称

ta:・ta:ta・tandaru

人を表わす不定称「誰」にあたる形は、専ら ta: が用いられる。複数形 ta:ta は対等の者および目下の者に対して用い、tandaru は目上に対して用いられる。

- ④⑤ Q: ?ri: du:ʃi ?ama-ŋkai ?itʃutan-do:.
〈おまえの友達 あそこへ行きよったよ。〉
- A: ta:ta ga. 〈誰誰か〉
- ④⑥ tʃipu hu:raritase: tandaru janʃeta:.
〈きのう来られたのは どなたがたでいらっしゃいましたか。〉

ta:・ta:ta の用法は、自称および敬意の入らない対称に準じる。主格を表す助詞 nu <の>, 連体格を表す助詞 nu <の>・ga <の> は後置されない。ta: 単独で主格を表し (例④⑥), 連体格を表す (例④⑦)。

④ ?ure: ta: tjiwamiti ?ajo: . <それは 誰が決めたのか。>

④⑦ hure: ta: k'wa:-ga. <これは誰の子か。>

また、「誰」の敬称としては、da:-nu hata <どこの方>, da:-nu tʃuntʃa <どこの方々> も用いられる。

2 指示代名詞

当方言の指示詞の体系をまとめてみると次のようになる。

伊江島方言の指示詞

品詞 範疇 称	代 名 詞				連 体 詞		副 詞
	事 物	場 所	数 量	大 き さ	関 係	情 態	方 法
近 称	huri	huma	huttsa	huppi	hununu	hunna	hani han
中 称	?uri	?ma:	?uttsa	?uppi	?unu	?unna	
遠 称	?ari	?ama	?atssa	?appi	?anu	?anna	?ani ?an
不 定 称	dziru nu:	da:	?itʃatssa	?itʃappi	dzinnu	?itʃana ?itʃagana	?itʃa

(1) 事 物

huri・?uri・?ari・dziru・nu:

具体的な物を指し示す場合、近称 huri <これ> は手の届く範囲までの物を指し、遠称 ?ari <あれ> は手の届かない遠くのものゝ指す。中称 ?uri <それ> は、話者の手の届く範囲すなわち huri の領域のものゝ指すことがある。

④⑧ tʃa: numiba. sata. ?uri, ?uri. sata k'e:ba.

〈お茶を飲みなさい。砂糖だよ。これ、これ。砂糖をおあがり。〉

例④⑧は、お茶うけの黒砂糖を手にとって、話し相手にお茶をすすめている時の言である。また ?uri は、話題となったものを指し示すときによく使われる。

④⑨ 親: ?ari tuti ʃu:. 〈あれを取っておいで。〉

子: nu:ga. huri? 〈何? これ?〉

親: ?N:. ?uri jattsa. 〈ウン。そうだよ。〉

さらに、対談している時など質問に答える人が最初のうけ句としてよく ?uri を用いる。

⑤⑩ Q: ?unu ʃugajuru dzairjo:-ja nu:-nukwe jajabita:.

〈その造る材料は何々などでしたか。〉

A: ?ure: to:pu-nukwe ?iritai-jo…….

〈それは 豆腐などを入れてね……〉

?ari は、ある程度長い談話をしている時、話題を変えるつなぎことばとして使われることも多い。

(2) 場所

huma · ?ma: · ?ama · da:

huma 〈ここ〉は話し手の手の届く場所を指す。?ama 〈あそこ〉は話し手から遠く離れた所を指す。

⑤⑪ huma: nife: ʃimamuraja:-di ?ju:ru ja: jajabitsija.

?ama-natuti dzi:bata wujuse:, ?anu jumi-du jari.

jinaungwa-du jari:. 〈ここの西は島村屋という家でございますね。あそこで地機を織っているのは、あのう 嫁さんですか。娘さんですか。〉

?ma: 〈そこ〉は ?uma の ?u 音脱落形であろう。非脱落形 ?uma は最上位の対称代名詞であり、場所代名詞として用いられることはない。

?ma: 〈そこ〉は、一度話題になった場所を指し示す時によく用いられる。

- ⑤② ?ama-naiti nupuru ?utu-ŋ ?aru-ba:. ?matŋi-ja ?upusa:
 ?upuŋo: me:-nai-du ?atu nupu:saŋ-di ?umuti…… <あそこで
 (酒を) 飲む音がするんだ。そこへ来ては 多くはおじいさんの前である
 から飲めないと思って……>

方向を示す代名詞「こちら」「こっち」に対応する語はなく、場所代名詞で表現される。

- ⑤③ pamme: ?ama huma: dŋi, tuttai nu ŋŋai ŋi:……
 <食糧は あっちこっちへ行って、取ったり何したりして……>

- ⑤④ huma-ŋkai hu:ba. <こっちへおいで。>

da: <どこ> の例

- ⑤⑤ ?e:, masanobo:i, da-ŋkai ?itŋo:.

<オーイ、マサノブー、何処へ行くんか。>

- ⑤⑥ tadi-nu muŋ-ja haniku-nai-du ?usurati ?atu, da: jatar
 waharaŋ. <旅の者は砂山に埋められたから、どこだったかわからない。>

(3) 数量限度

huttsa · ?uttsa · ?attsa · ?itŋattsa

接尾辞 =ttsa <=だけ> は数量の限度を表す。?attsa <あれだけ> はあまり用いられない。

huttsa の例

- ⑤⑦ ?ra-ŋkai tŋitŋaŋi wuke: ?atu-ŋkai judziriwatajutu, huttsa
 jatu huttsa watsirangu:tu warabinŋa-ŋkai tŋitŋaŋi-jo:. <おま
 えに聞かせておけば後に譲りわたるから、これだけだから これだけ忘れ
 ないように子どもたちに聞かせなさいよ。>

?uttsa <それだけ> の例

- ⑤⑧ A : tŋui ?ataru: ŋipja:kusibuna-di ?ju:ra, wappu nati
 wutaŋ-di. <一人あて400坪ずつというか、分賦になっていたんだっ
 て。>

B : ?anse: tʃui wuru ja: sigui ?uttsa jajabiru-ba:.

〈そしたら一人いる家は、すぐそれだけです。〉

A : ?na ?uttsa. t'ai wuru ja:-ja ?uttsa.

〈もうそれだけ。二人いる家はそれだけ。〉

?itʃattsa <どれだけ> の例

⑤⑨ ?ra:-duŋ makire: ?itʃattsa hakijo:.

〈おまえでも負ければ、どれだけ賭けるか。〉

(4) 大きさ程度

huppi · ?uppi · ?appi · ?itʃappi

接尾辞 =ppi <=ほど・=ぐらい> は大きさや分量の程度を表す。

?uppi <それほど・それぐらい> の例

⑥⑩ ?unu ja:-di ?e:, ?itʃa:ʃiŋ tʃu:dake: ?aru ba:-do.

?unu so: wataʃi, ?uri-nai ?utʃakiti-du sabaʃutaŋ-di

?ju:siga, ʃja: makuti wutaŋ-di. ?anjutu haradzi-ja ?uppi-

du ?aigi:sa ?asiga-jo:…… <その家と言えば、どうしても人丈はあ

るぞ。その(家に) 竿をわたして、それに(髪を) うちかけてといていた

というが、下にたくっていたって。だから頭髪はそれぐらいあったらしい

んだがね……〉

(5) その他

ʃi:

ʃi: は「何も彼も」の「彼(か)」に相当する。不定称「何」や「誰」などと呼応して、並列される物や人を漠然と指し示す。

⑥⑪ ?unu ti:-ja ʃin-nu ?aruttsa, ?unu tʃu-nu ?udo:gumuŋ,

mata nu-ŋ ʃi-n-nu munu huma-nai kadzajuru-ba:.

〈その日は着物のあるだけ、その人のお道具物、また何も彼もの物を

ここに飾るんだ。〉

- ⑥2 matsi-jara nu:-jara ɸi:-jara tʃura:ku ?anʃi ʃikinʃotʃi……
 <松やら何やら彼やら きれいに そうして飾りつけさせて……>
- ⑥3 hunu ?i:ɖʒima-nu tʃo: ta: tuɖʒi ɸi: tuɖʒi-duŋ tʃe:ɿ,
 watta tuʃi-ja tʃiʃe: padzika:sanu-jo:ɿ. <この伊江島の方は、誰の
 妻、彼の妻とでも言えば、私らの年の者は聞けば恥しくってねえ。>
- ⑥4 ta: padzitiʃi siʃuŋ. ɸi: padzitiʃi siʃuŋ.
 <誰が針突(入墨)を突く。彼が針突を突く。>

お わ り に

以上、伊江島方言の代名詞について、純粹方言話者の資料を分析し、その意味・用法を述べた。

当方言代名詞の特徴的なところをまとめて記す。

普通名詞と代名詞の機能上の差は、人称代名詞において認められる。主格を表す助詞 nu <が> と連体格を表す nu <の> は、対称の敬称 (?uma · ?undʒu) を除いて人称代名詞には後置されない。人称代名詞単独で主格・連体格に立つ。他沖縄方言では、人称代名詞には格助詞 ga <が> が付いて主格を表すが、当方言では主格を示す ga <が> はない。また、連体格の ga <の> は、数詞と接尾辞 =si の後にしか使われない。

自称の単数形には wa: と wan の2語がある。wa: は主格と連体格に立つときのみ用いられ、wan は文中どこにでも用いられるが、連体格にだけは立ちえない。

対称は、話し相手によって「目下及び対等」「目上・敬愛」「目上・尊敬」三種の区別をする。目下及び対等の者に対する ?ra: · ?ri: は当方言独特の語である。敬愛の意の対称 ?uga も使用地点はごく少ない。

複数形 watta · ?ri: · ?umande は単数の意にも複数の意にも用いられている。

(注)

内間直仁氏は下記文献において、「いわゆる聴者を表わす代名詞には話し手が発言者と聴者の関係をどう認識しているのか、という関係認識の方法が如実に具現されてくる」として、「ある地域では語形でも『卑称，対等，敬愛，尊敬』の四つが区別されているのに対し，他の地域では『対等，敬愛，尊敬』の三範疇，あるいは『対等，敬愛』の二範疇，そういう区別のない地域などと様々である」と説明されている。

参 考 文 献

- 内間直仁：『琉球方言文法の研究』，1984，笠間書院
仲宗根政善：『今帰仁方言辞典』，1983，角川書店
国立国語研究所：『沖繩語辞典』，1963，大蔵省印刷局